

序論 本研究の動機

第一節 本研究の動機

二十一世紀の台湾に生きる私から見ると、私の知っている限りの範囲では、日本文化を代表するものとして最も魅力的な部分は、殆ど全部江戸時代に開花している。特に江戸時代の文化の爛熟期と言われる文化・文政年間(1804-1830年)、各方面の文化の発展は盛んになっていた。それは、経済条件が向上した庶民たちが衣食住などの基本的なもの以外で、自分の生活に対してさらに深い要求があったからであろう。レジャーの概念が芽生えたその時代の人々は、時間と金銭をいろいろな遊樂に投資し、生活の精神面を充実させることを求めている。彼ら江戸の庶民たちが好きな遊樂の中には、旅行も含まれていた。

江戸時代中期以来、街道や宿駅制度が整備された。幕府の体制も安定して、庶民も遠方の旅に出るようになった。寺社参詣や巡礼など信仰を名目とした物見遊山のような旅も、文化文政期には一つのブームが起きていた。『江戸名所図会』はこのような背景で出版されたのである。それ以前にも、江戸にある名所を紹介する書物がたくさん出版されていたが、『江戸名所図会』は豊富な挿絵で優れた評判になった。『江戸名所図会』は神田の名主であった斎藤幸雄、幸孝、幸成(月岑)三代によって作られた絵入り地誌である。企画から出版までに四十年という年月がかけられた、新たな江戸の画期的な地誌と言える『江戸名所図会』は、父祖二代にわたるこの大事業を引き継いだ月岑に至ってようやく完成された。著者の一人である斎藤月岑は、挿絵について、凡例の中で、

凡そ神社仏閣の幅員方域を図するは、専ら当今の形勢を模写す。且つ地図の間に四時遊観の形勢を絵くに、その態度・風俗・服飾・容儀、これ亦当今の形容を図す。旧地に基ついて画するものは、各々時を分てり。これその地の風光を潤色して、他邦の人をして東都盛大の繁栄なる事を知らしめ、且つ童蒙の観覧に倦む事なからしめんが為なり¹。

と書いた。約二百年後の今、私も「他邦の人」として、その生き生きとした挿絵により、当時の江戸の「盛大の繁栄」がさらに具体的に想像できるのである。

この作品には注目すべき点が二つあると私は思う。一つは、斎藤月岑が捉える江戸の範囲についてである。『江戸名所図会』に捉えられた江戸は、単にその境界線を越えるだけではなく、今の東京都全体よりも広く、郊外にまで及ん

¹『新版 江戸名所図会 上巻』26頁。

本論文では鈴木棠三・朝倉治彦校註『新版 江戸名所図会 上・中・下巻』(角川書店、昭和50年)を使用した。

でいる。そこには、江戸周辺の農村までも含まれている。上述した収録範囲の広さのほかに、名所にあげた数の多さも驚くべきものである。その上、収録された項目をよく見ると、興味を引かれるところがある。それは、一〇四三の地が名所として取り上げられているうち、宗教的な場所が過半数を越えることである。その上、それぞれの寺社についての描写の量は皆同じではない。

他の案内書には見られない空間的範囲と、圧倒するような名所の数と、四季それぞれ違う遊楽の様式によって、斎藤月岑やその父・祖父らは、自分が生まれ育った江戸に対する自信と誇りを十分に示した。同じ都会っ子である私は、その自分が成長した都市への感情を理解できる。そのためでもあるが、斎藤家が『江戸名所図会』の中に表わした観念的な江戸と、取り上げた名所などに私は関心を持っている。

私の住んでいる台湾は日本の南にあって、四季はそれほどはっきりしていない。遊楽の様式も季節に拘っていない。冬の時に海で泳ぎたければ、墾丁（南台湾にある町）に行けば泳げる。『江戸名所図会』の取り上げた名所は半数以上がお寺や神社などの宗教関係の所であることは、台湾の人にとって、おそらく理解しにくいことである。今日本の京都に行くと、お寺や神社で写真を撮る人は大勢いるが、台湾の人は寺社参りが遊びだと思っではないので、お寺や廟（道教の宗教地）で写真を撮る人は殆どいない。江戸時代の浅草寺のように、お寺の近くには遊郭（風俗地区）があることも考えられない。神仏に対して、台湾の人は極めて厳粛な態度を持っており、娯楽を連想しほしない。それに、科学の進歩によって、家を出なくても余暇を楽しめるいろいろな遊楽がある。

時代と地域が異なり、台湾の人の遊びと『江戸名所図会』に描写した遊びとが違うのは当然である。しかし、「江戸時代の日本人の遊び」には、異なるものだけではなく、台湾の人が遊楽の中に追求しようとするものと同じものもある。非日常的な場所や行動の中に、日常的な生活から解放される自由を求めるのは、遊楽あるいはレジャーの基本意義であろう。これらの異なるものと同じものを分析することを通して、人々の生活と精神についての理解を深めることができるであろう。

第二節 先行研究と本論文の課題

(1) 『江戸名所図会』について

まず、名所案内記全体についての研究から、『江戸名所図会』の名所図会としての特徴を見ておきたい。水江漣子は案内記（名所・遊覧記その他を含む）を大きく四つの類別に分けている²。その中に、他の案内記とは違って、名所図会は物語性が乏しく、和歌名所集や歌枕名寄などの古典的な修飾を重視しないものであり、強い実用性と目的性が特色であり、「作者の制作意図からみれば、作者内部の事実認識における直接表現」であるものだと指摘している。

『江戸名所図会』についての研究は、二つの大きな流れがある。一つは、『江戸名所図会』の編纂と成立過程を考察するものである。もう一つは、『江戸名所図会』の挿絵や記述内容を史料として利用し、当時の江戸の様子を読み取るものである。

『江戸名所図会』は、斎藤家の親子三代（幸雄、幸孝、幸成（月岑））が共同合作で完成した著作である。三人が名所図会のどの部分を担当したのかについて、森銑三は「江戸名所図会と斎藤幸孝」³を題にした論文で、『江戸名所図会』の編纂には幸孝が最も苦勞したと指摘する。その根拠としたのは、『郊遊漫録』である。『郊遊漫録』は『江戸名所図会』を編纂するため、実地調査に行く斎藤幸孝が途中で書いたノートである。この調査ノートによって、幸孝と絵師の長谷川雪且が最も多く訪れたのは寺院である。その時の旅の様子を見ると、実際に遭った困難が分かって、公の後援が全くなしに、私人の仕事として『江戸名所図会』を作り上げようとした、幸孝の苦心を窺えると森は述べている。

そして、名所図会の実地調査について、斎藤智美はさらに『郊遊漫録』の内容を検討して、『郊遊漫録』では簡単に行けないような名所もあると指摘した。そして、『江戸名所図会』は実地調査をベースにして作り上げられたものと言っても、必ず簡単に行ける場所ばかりを取り上げたのではないという結論を出した⁴。

一方、江戸の当時の生活を理解するためにも、『江戸名所図会』は貴重な史料である、と評価されている。特にリアルな挿絵は、歴史学での評価が高い。

²水江漣子「初期江戸の名所記」『江戸町人の研究 第3巻』吉川弘文館 1973年

³森銑三「江戸名所図会と斎藤幸孝」『森銑三著作集 第十一巻』中央公論社 1972年

⁴斎藤智美「『江戸名所図会』の実地調査」(駿台史學. (116) [2002. 8])

それに対して、千葉正樹はそのリアリテイの程度に疑問を投げかけ、「江戸名所図会」の挿絵を中心にして分析して、製作者が意図的に特定の描写を排除した可能性があることを指摘する。さらに、挿絵の登場する順番に工夫をし、江戸を特殊なイメージで演出しようとする製作者の意図があることを指摘する⁵。

(2) 行動文化について

江戸時代後期の文化を理解する上で、行動文化という概念がある。行動文化というのは、この後期、社会群衆が大量のエネルギーを遊樂行為に投入する現象を指すものである。この文化現象の中にある遊樂は、きわめて広い生活領域にわたっており、遊芸、物見遊山、参詣の旅など様々な活動を含んでいる。そして、文化文政年間（1804－1830）に頂点に達している。それはこの時期の江戸町人の最も著しい特色だと言われてきた。

はじめてこのような概念を提出したのは、西山松之助である⁶。行動文化という社会現象が起きる時代の背景には、支配者と被支配者との間に生じた権力の衝突がある。西山は、行動文化について、被支配階層の自己解放という解釈を作り出した。言い換えれば、当時の群衆は身分階層を意識し、支配されることから自由感を探る需求があるため、各種の遊樂活動に没頭していたと言えるとする。しかし、この自己解放の論理は検証するのが難しく、一般化するのも困難である。さらに西山は、幅広い遊樂行動を一括し、行動文化という現象にまとめているが、人々の行動する実態や考え方などが、実は具体的に検討されたとは言えないのではないだろうか。

斎藤月岑は自分の日記に、寺社参りや名所廻りなどの遊樂を詳細に記録していた。月岑の多彩な遊びは、江戸後期の行動文化という現象を説明する場合に、絶妙な素材になっている。月岑は熱心に遊びに出かけていたため、数多くの著作を残した。祖父と父と一緒に作り上げた『江戸名所図会』は、斎藤家の人たちの遊びへの関心がある程度に反映しているのではないか。しかし、斎藤家の生活実態と『江戸名所図会』に記述された名所と遊びの内容の関係とは、具体的には検討されていない。

(3) 本論文の課題

以下、本論文を執筆するにあたっての課題を述べる。これは本論文執筆の目的となるものである。

⁵千葉正樹『江戸名所図会の世界』吉川弘文館、2001

⁶西山松之助「江戸町人総論」『江戸町人の研究 一』、吉川弘文館、1976年
西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」『江戸町人の研究』吉川弘文館、1980年

- ① 斎藤月岑の日記を通して、町名主の生活実態を観察する。
- ② 出版物としての『江戸名所図会』の最終作者の文化背景、編纂意図と出版過程を明らかにする。
- ③ 『江戸名所図会』に見る名所と遊樂を分析し、江戸の人々の遊樂様式の特徴を把握する。
- ④ 実際の地理的な江戸と、『江戸名所図会』の中に据えられた江戸を把握し、三代にわたる斎藤家の江戸観を解明する。
- ⑤ さらに、月岑がその存在した時間（19世紀前半）と空間（江戸）で興味深いのは、現在人の視点からどういう意味を持つのかということである。あるいは、過去のある時代の特殊性を象徴するのだろうか。このことも研究課題である。

第三節 本論文の研究方法

江戸時代には、全国各地の名所旧跡を案内する書物が数多く編纂され、刊行された。『江戸名所図会』の前には、江戸にある名所を紹介する案内書も少なくなかった。しかし、『江戸名所図会』のように、親子三代にわたって、しかも現地に行って調査することで作り上げられたものは、ほかに無かった。本書の出版後、その影響を受け入れた書物も少なくなかった。一つの著作がその時代にある位置付けを明らかにするためには、著者の著書を出す願望だけでなく、『江戸名所図会』の場合には、挿絵担当の絵師との協力関係や、出版者（版元）の役割と当時の出版環境も理解しなければならない。したがって、本論文では、今までの研究成果を踏まえ、まず月岑の日記と著書に関係する記録を分析することで、『江戸名所図会』の書誌学的な研究と説明を行いたいと思う。

他方、『江戸名所図会』以外に、斎藤月岑は文化人として文化業績を数多く作り上げた。町名主の忙しい仕事の合間に、私人の趣味として、自分の各種の文化活動への関心を著作にして出版していた。多忙な公務との間で、いかにバランスをとっていたのか。このような関心から、斎藤月岑の日記と著作を通して、彼の生活を分析する。毎日の生活、町名主の仕事の内容と苦勞、遊びの様子、他の知識人との交際関係など、様々な関心などを検討し、町名主の生活実態を明らかにする。このようにして、当時の一人の知識人としての斎藤月岑の日常生活を再現していこうと思う。

そして、『江戸名所図会』の中に取り上げた名所の名前、位置、規模、内容、特色、地域的な広がり等を検討する。それによって、斎藤家の代表作と言える作品の内容を具体的に明らかにする。そして典型的な名所の記事の分析も行い、斎藤家は江戸をどのように把握していたのか、江戸の名所にどう思っていたのか、その漠然とした江戸の境界線をどう認識していたのか、を読み取りたい。

それによって、『江戸名所図会』に示されている遊樂を分析し、月岑たちはその遊樂をどのように楽しんでいたのか、という遊樂様式の特徴を把握していきたい。

日常生活について詳細な記述をする『斎藤月岑日記』と当時の江戸の様子を描く『江戸名所図会』を使い、衣食住という生活の基礎と、江戸に住んでいる人の遊びの様子と意識が、近世後期でどのようになっていたのか、という疑問を少しずつ解明していく。さらに、現代の日本の生活様式や伝統文化の多くが形成された江戸時代に、月岑のはたした文化的役割を明らかにしたい。

